

■朝会講話「落合直文について」



みなさん、このパネル見たことありませんか？

その通り、職員室前に2枚セットで掲示しているパネルです。

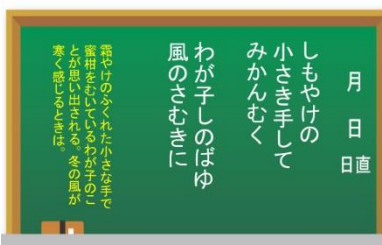
去年の6年生がすぐ近くの松崎片浜にある国指定の名勝「煙雲館」に行ったときのことまとめたパネルです。今日はこの煙雲館で生まれ、育った、落合直文という人についてお話したいと思います。



実は、落合直文の作品が、皆さんが使っている教科書に載っています。知っていましたか。5年生の国語の教科書の198ページ「季節の足音」のコーナーに載っています。(出典は『現代短歌全集 第一巻』, 明治42年より前)

前に俳句のお話をしましたが、落合直文のこの作品は「短歌」といい、5・7・5・7・7の31音で作られた短い歌です。

難しい漢字をひらがなにしたので、5・7・5・7・7のリズムを確かめながら読んでみてください。



どういう情景や想いを詠んだ歌かというと、

こんな冬の風が寒く感じるときは。霜やけのふくれた小さな手で蜜柑をむいているわが子のことが思い出されるなあ。と、幼い我が子を思う父親の気持ちを読んだ歌です。

では、この短歌の作者の人となりについて見ていきましょう。ウィキペディアなどを使って調べました。



落合直文は1861年(文久元年 幕末)に気仙沼市、松崎片浜に生まれました。

13才で仙台神道中教院に入り、その学校の校長だった国学者の落合直亮に才能を認められて、養子になりました。その後、東京大学古典講習科で神学や国文学を学び、国文学者、そして歌人として明治時代に活躍しました。

第一高等学校(今の東京大学)や皇典講究所(今の國學院大学)などで教師をし、「ことばの泉」という辞典も作りました。



歌人としては、1893年33才のころ、「浅香社」という短歌のグループを作りました。弟子には、与謝野鉄幹、与謝野晶子、高村光太郎、石川啄木、北原白秋など今も名を残す。有名な歌人、詩人がたくさんいました。

一番の業績だと私が思うのは、それまでは、上流階級の人たちの趣味でしかなかった日本古来の和歌を、直文は、飾らない普通に使う話し言葉で詠む「短歌」に改めたことです。

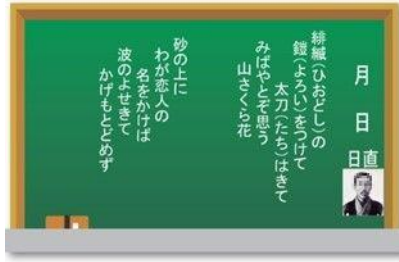


短歌は小学校でも勉強しますが、今、私たちが短歌に親しむことが出来ているのは直文のお陰だと言われています。だから、直文は現代短歌の父と言われています。

直文の短歌の作品をいくつか紹介しましょう。

緋緘の 鎧をつけて 太刀はきて みばやとぞ思う 山ざくら花

意味は、華麗な赤色の鎧を身に着け、大きな刀をさして、花見をしたいと思う、咲き匂うこの山桜の花よ。です。この歌に詠まれたような、これからまさに武勲を上げようとしている勇ましい若武者は、日清戦争のあたりの時代のヒーロー像でした。この歌で、直文は当時の若者の心をとらえ、「緋緘(ひおどし)の直文」と言われるようになったといえます。また、直文が「桜井の訣別」という楠木正成の死を覚悟した出陣をうたった歌を作詞し



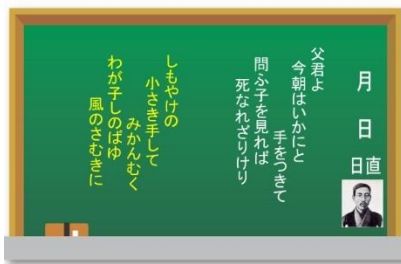
たこともあり、直文は戦時中の「忠君愛国」(君主に忠義を尽くして、国を愛すること)という明治時代の考え方の象徴する人のように考えられていました。ちなみに、直文が先生をしていた旧制一高の明治42年に作られた寮歌は「緋緘着けし」という歌で、この短歌をモチーフにしたものだという事です。

一方で直文はこんな歌も詠んでいます。

砂の上に わが恋人の名をかけば 波のよせきて かげもとどめず

波打ち際の砂の上に書いた愛する人の名前を寄せる波が消してしまい、あとも残さない。ぼくの恋ははかなく終わってしまった……忠君愛国の勇ましいヒーローを讃えていた歌人が、恋の儚さと無常を浜辺の情景とともに描いています。どうですこの振れ幅。

弟子である与謝野鉄幹に直文は「古人(昔の人)にも今人(今の人)にも追随するな(真似をするな)独自の歌を詠め」と語ったそうです。自由な感性を取り入れ話し言葉で気取らない直文の歌は、近代短歌の父として、今につながる流れを作ったのです。



今の教科書にミカンの歌が載っているのは、10年ぐらい前、前の前の教科書を作っていた編集者から「今度の教科書に『季節の足音』というコーナーを作って、季節毎の詩や俳句、短歌を載せたい。東北地方の歌人と作品を推薦して欲しい」という依頼に応じて、同じ気仙沼出身の落合直文を私が推薦したからです。当時、子育ての真っ最中だったこともあり。子を思う親心を詠んだ直文の短歌に惹かれていました。

父君よ 今朝はいかにと 手をつきて 問ふ子を見れば 死なれざりけり

肺の病気を患っていた直文に対して、お父さん、今朝はお体の調子はいかがですかと心配する我が子を見ていたら、死んでしまうことなんてできないではないか。という歌です。

霜やけの 小さき手して 蜜柑むく わが子しのぼゆ 風の寒きに

ミカンの歌も、病氣療養のため一人家を離れている直文が愛おしい我が子を思い出して、寒い風が吹きすさぶ今頃は、可愛い手が霜焼けでかゆいんだろうなあ、元気であるのだろうかと心配している歌です。当時の私はこの歌が一番好きだったので、この歌を推薦しました。



最後に、落合直文の生まれた家や家族についてお話しします。国学者であった落合直亮の養子に入る14才までは、学校からすぐその松崎片浜の煙雲館に住んでいました。生家は伊達政宗が開いた仙台藩伊達家の家来の中で一番偉いと言われる家柄で、気仙沼松岩を治めていた殿様、鮎貝太郎盛房の二男として生まれました。本名は鮎貝亀二郎、幼名は盛光といいました。兄の盛徳は初代気仙沼町長だった人で、市民会館の所に銅像が建っています。生家は、お庭も大変立派で、国指定の名勝に指定されています。庭園の中には、落合直文の歌碑も建てられています。私が7年ぐらい前に行ったときも、館主の鮎貝文子さんにお庭を案内・説明をしていただきました。



みなさん「鮎貝」という名字に聞き覚えはありませんか。そうです。教頭先生の名字も鮎貝です。直文のお兄さんの初代気仙沼町長の盛徳さんは教頭先生のひいひいお爺さんです。落合直文と鮎貝教頭先生は親戚なのです。



昨年は、落合直文の生誕160年で11月には生誕記念祭も行われました。また、落合直文については、道徳などで使う「みやぎの先人集 未来への架け橋」にも紹介されていますので、興味のある人は読んでみてください。

今日は郷土の偉人、落合直文についてお話ししました。1, 2年生には少し難しい話でしたが、最後まで聞いてくれてありがとうございました。終わります。